

# 美波町の新たな医療体制への取り組み ～南海トラフ巨大地震に備えて～

徳島県美波町長

影治信良



## はじめに

美波町は平成18年3月31日、旧由岐町と旧日和佐町の2町合併により誕生した町である。

徳島県の東南部に位置し、人口6,627人、世帯数3,245世帯、国保被保険者数1,709人、高齢化比率46.9%、総面積141km<sup>2</sup>である。

太平洋に面し、海岸部は風光明媚なりアス式海岸で室戸阿南海岸国定公園の中央部に位置し、四国霊場23番札所薬王寺やアカウミガメが上陸産卵する大浜海岸があり、年間100万人の観光客が訪れる。

その一方で、南海トラフ巨大地震発生時の最大津波高は県下一高い20.9mの想定となっている。

## 合併時の美波町医療体制の現状

合併により国保由岐病院（50床）、国保日和佐病院（30床）および阿部診療所の2病院1診療所を運営することとなった。しかしながら両病院の経営は厳しく、合併後一般会計から病院会計への繰出金は多額に上り、

# message

町財政の持続性を揺るがしかねない状況であった。また、両病院とも老朽化（日和佐病院が昭和42年建築、由岐病院が昭和53年建築）が著しく、かつ未耐震の建物であった。

このため、町では平成22年11月に「美波町病院事業あり方検討委員会」を組織し、検討を重ねていただいた（検討期間中の平成23年3月に東日本大震災が発生）。平成23年11月に答申を受けると東日本大震災の教訓も摂取し、美波町医療体制整備方針（素案）をとりまとめ、住民説明会に臨んだ。説明会は11回（延べ参加者800名）に及び、説明会場では激しい意見があり困難を極めたが、なんとかご理解をいただいた。感謝を申し上げたい。



## 建設のコンセプト

美波病院建設のコンセプトとして、地域に求められる医療の提供、さらには災害時にも医療を継続できる施設が望まれた。

その結果、建設場所には標高23mの阿南安芸自動車道「日和佐道路由岐IC」出入り口付近を選び、建物は鉄筋コンクリート造3階建の免震構造とし、病床数は50床（一般病床）、診療科目は内科、外科、整形外科、脳神経外科の4科で、今後発生が予想される南海トラフ巨大地震・津波から病院機能の喪失を防ぎ、入院患者の安全が確保できる病院として、また良質な医療の提供と訪問診療など、地域に根ざした医療サービスを提供できる病院として整備した。

診療所については無床とし、ピロティ（高床式）構造を採用し、避難ビルとしての機能も持たせ、医療のみならず、町の保健福祉分野における多様なニーズに対応するため、住民が保健・医療・福祉サービスを一体的かつ総合的、継続的に受けられる医療保健センター（診療所、健康増進課、地域包括支援センター、社

会福祉協議会、透析クリニック）として整備した。

住民の期待を受けて、美波病院は平成28年3月開院、医療保健センターは平成29年8月にオープンした。



## 災害医療の連携（その日に備えて）

美波病院・診療所の完成により、医療体制の持続可能性が大幅に高まった。しかし、大規模災害発生時には、多くの負傷者が運び込まれるだけでなく、ライフラインの停止や医薬品の不足、医療従事者の負担増を招き、麻痺状態に陥る可能性が極めて高いため、「震災から助かった命を震災後も守る」との思いから、平成27年2月、特定非営利法人「AMDA」と大規模災害時の支援に関する協定を締結し、その後、倉敷中央病院（岡山県）、福山医療センター（広島県）等と連携し、定期的に災害訓練等を重ねるなど、災害医療の連携による地域レジリエンスの向上を目指しているところである。

また令和2年1月20日、徳島県立病院、徳島大学病院、徳島赤十字病院、美波病院など13の公立・公的医療機関が徳島医療コンソーシアム協定を締結し、各病院間の連携・協働を進め、医師をはじめとする医療従事者を確保し、地域医療の充実並びに医療の質の向上をめざす取り組みも始めているところである。



## おわりに

過疎地の地域医療は医師の確保、診療体制の充実、交通手段の構築等々、課題は山積しているが、一つずつ解決しながら、より良い医療提供体制を構築するとともに、災害時対応拠点病院としての機能も持ち合わせ、長期的に安定した医療を提供することにより、「住んでよかったと実感できるまち・災害に強いまち」を目指していく。